

特別賞

(熊本日日新聞社賞)

笑顔のために

天草市立本渡中学校 三年 齊藤 陽子

消えることのないいじめ。今もどこかで、誰かが苦しんでいる。泣いている。私は何もできなかった。人事だと思つて、見て見ぬふりをしていた。

中学校生活三年目。今まで何度も何度も人権集会が開かれ、いじめについて考えてきた。その度に、自分と向き合うのだが、三年たった今でも、あの頃と変わらず、見て見ぬふりをしている自分がいる。逆に自分がいじめられるのがこわいからという理由で、知らんふりをしていた。

ある日突然、学年集会が開かれた。いじめについての話。三年生で苦しんでいる人がいるという事実。そして、その人がいじめられているのを多くの人を知っていたという事実を聞かされた。先生方が一人一人精一杯話をしてくださった。先生方の一言一言が心に強く突き刺さった。話を聞いていて、自分がとても情けなく思えた。その場から逃げ出してしまいたかった。いじめている人も

悪いが、それを見て見ぬふりをしている私たちも悪い。私たちも、いじめているのと同じだ。見て見ぬふりをしない強い人に、勇気をもった人になりたいとその時は思った。でも、勇気がない。いじめをとめれるほど私は強くない。先生がおっしゃっていたが、「もし自分がいじめをとめて、逆に自分がいじめられてもいい。」私は先生のようにには思えなかった。「やっぱり自分は弱いまま」この言葉がさらに自分を苦しめた。

その後、教室に戻り、担任の先生の話聞いた。集会のときにとったアンケートの裏の感想を先生が読まれた。ある一人の生徒が綴ったものだった。その人はある部活に入っているらしく、その部活でもいじめのようなことが起こっていた。その人は、いじめられている人に一言言った。「負けんなよ。」相手はこう返した。「絶対負けない。」その話を先生から聞いたとき、私はどちらの人もすごいと思った。私だったら、いじめられている人に声をかけられなかっただろうし、いじめられている立場のほうだったら、いじめに立ち向かうことなんてできなかった。その時、人は決して一人ではないのだと思った。声をかけてくれる人がいるかぎり、人は決して一人ではない。それと同時に、言葉というのは人を笑顔にすることができるが、悲しませることもできるのだと改めて思った。もしも人間が、人を幸せにする言葉か、人を悲しませる言葉のどちらかしか話せなくなるのなら、誰だって迷わず、人を幸せにする言葉のほうを選ぶだろう。人を悲しませる言葉は、結局自分も相手も傷ついてしまうからだ。きつと誰もが、言葉で人を幸せにしたことがあるだろうし、幸せになったことだってある。逆に、人を悲しませたこともあるだろうし、悲しんだこともある。人は、傷つき、傷つけあいながら生きているのだ。だから、いじめがなくなることはないと思う。いくらいじ

めをなくしたいと思っけていても、いじめがなくならないのは事実であり、現状である。「思っただけではダメだ。ちゃんとそれを言葉にして、行動しなければいけないのだ。人事なんかじゃない。目を背けてはいけない。弱い自分のままではいけない。今が動くとき。」そう自分に言い聞かせた。

私たちは、今年でもう義務教育が終わり、一歩一歩大人の階段を登っている。大人の社会はきつと、私たち子供の社会なんかよりずっと厳しいと思う。でも、そんなのに負けない強い人間になりたい。大きな大きな心をもった人になりたい。それが私の今の目標であり、社会の目標でもあると思う。一人一人がその目標に向かって動き出したとき、笑顔が生まれる。しかし、前にも言ったがいじめがなくなることはないと思う。だから諦める。そうではない。いじめをなくそうと努力することは必要だ。未来の笑顔のために私たちは動かなければいけない。

これからも私は、学校という小さな社会を生きてい



く。いじめをなくすために、今私ができることは何なのか。自分と向き合いながら、しつかり考えていきたい。私ができることは、ととても小さなことだけれど、みんなの笑顔のために頑張りたい。

また、今回いじめについて考えたが、友達についても考えてみた。今、学校生活がとても楽しい。それは、友達という存在がいるからだ。つらいことがあっても、友達の笑顔を見ると安心する。悲しいことがあっても、自然と笑顔になっている。そんな友達に私はいつも感謝している。私も、人を笑顔にできる人になりたい。そして、友達を大切にできる心があたたい人になりたい。そのために、今日も私は笑顔で生活する。人を笑顔にできるものは、やっぱり笑顔だから。